



里見八犬傳

拾五編

卷三十三



~13
709
82



曲亭馬琴著

明治三六年十月九日購求

第十五輯

八犬傳

東京名山閣版

13 709 82



南總里見八犬傳第九輯卷之三十三簡端附録作者摠自評
 稗官野史の言風を捕り影と逐ふ架空を根何を世の人の裨益ある其要の只
 春の日ハ獨坐の睡魔と破るべく秋の夕ハ寂寞の樹影陶と鑿と不足るの是を
 漢土ハ齊諧異苑の二書あり國朝ハ浦嶋子傳續浦嶋子傳あり便是和漢小
 説の鼻祖戲墨の嚆矢と云ふべ是より以降彼も我も其才ハ匿しけり宇都保
 源氏物語の艶みと且花言る水滸西遊記の奇くて且巧る其文絶妙句句錦
 繡定ハ是稗史の大筆和文の師表るものなり只其足る所を源語の事皆
 淫娃ハ過て反々勸懲ハ詳るを水滸ハ勸懲隱微ありて是を悟る者なり
 見ハ強人の義俠ハ過然是亦惜むべ其大柢を知るも知ざるも又善讀ゆめも
 讀ゆめも南倍氏戲墨と事と甘己ガ如記曲学者流ハ皆其類算ハ微き欲
 して糟と故ら垢脂と拈る和漢今昔幾人モ其才あり骨を換胎と奪て傑

八犬傳九輯卷之三

文藝叢書

出る。大筆殆世不罕。其骨と撰ぎ胎と奪と。國圖吞る。似て非る。者武を接ぐ。今に至りて衰へも。蓋其筆の遠祖傳へて。稗史物の本。取まる所。以のあふとせや。抑古昔は文人才子の稗史物の本。作り設る。必古人の姓名と借用して。胡意其事。と異ふ。壁言源氏物語。光君竹採物語。赫赤火姫。昔赫赤火姫と。胡美女人あり。詳不。まのこでん。水滸傳の宋江等。三十六人及彼晁蓋高俅等。西遊記の三藏法師。曲曲のふまをも。足る者。の意匠。て作り設て。要の充つ。未生の人も亦。多。水滸傳の地教七十二人。西遊記の孫悟空。猪八戒。沙悟淨。及諸麻鬼君の如。も。毛筆る。不。違。わ。又憶ふ。稗史の胡意。其歲月を具ふ。せ。是將作者の用心。を。正史と同じ。か。る。と。示。然。本傳の各と。出。北條長氏の。を。思。彼。長氏の伊豆より起りて。小田原より大森。實頼を伐。走。りて。其城。據。り。明應二。年の事。也。本傳の。云。文明十五年より。一元十二箇年後。然。と。本傳の。當時の

事と。況。安房の里。見。氏の山内。扇谷の西管領。と。兵を構。一。事。を。わ。る。く。も。わ。る。か。る。事。猶。多。る。本傳の。正史。不。合。外。の。作。り。設。け。一。條。も。年。號。を。あ。る。本。意。不。違。や。似。れ。ども。只。看。官。の。與。其。事。の。年。と。某。の。年。と。意。識。の。不。同。也。然。る。と。柱。の。膠。せ。る。者。の。虚。實。の。間。の。遊。ぶ。を。知。て。世。と。誣。ひ。俗。を。惑。は。せ。憎。と。論。ま。る。府。内。の。庶。民。は。毛。鶴。山。が。琵琶記の評。其。傳。奇。る。甘。茶。壺。成。評。也。て。其。の。甘。茶。壺。は。後。漢。の。蔡。邕。不。一。後。漢。の。蔡。邕。は。あ。る。と。是。別。人。と。是。る。べ。い。の。婦。幼。の。疑。ひ。を。解。く。足。る。老。實。者。の。言。の。似。ら。り。琵琶記の。甘。茶。壺。の。事。ら。む。西。廂。記。の。鴛。鴦。の。類。傳。奇。も。多。く。あ。り。て。古。人。の。姓。名。と。借。用。せ。る。者。此。間。の。能。樂。降。り。て。歌。舞。伎。淨。瑠。璃。本。の。如。し。看。官。誰。う。実。事。と。せ。や。明。の。謝。肇。淞。が。い。へ。く。今。の。人。稗。史。小。説。を。見。て。其。年。紀。事。實。の。正。史。不。合。さ。る。わ。れ。は。云。云。と。の。者。あ。か。の。如。く。今。の。史。正。史。を。讀。み。不。如。其。事。の。実。不。過。だ。ら。う。の。岡。巷。の。小。見。を。悦。ぶ。の。士。君。子。は。為。道。の。

在の勸懲正しけれ誨淫導慾の外中至或善人不幸にして悪人の惨毒の死
辱を曝さるるも作者宜く憚るべし勸懲不係れが因て意不和漢今其思
た奇才子あり未君子の大道を以て聞る才子あり其才は一なるも其才又思
遂に君子の大道を知りて勸懲正しらん其最難しともかたはべし其故予常
の唐山を大筆を稗史の作者は皆能学して君子の大道を知ざるなり余も其
稗史中淫奔猥褻の段間ありて悟らざる者ハ作者時好媚で醜情を
寫したるを思ふ豈然らばあらんや其淫奔者ハ残忍兇悪の男女ありて善
人其の事なり譬言水滸傳武大郎の妻潘金蓮が西門啓と奸通の醜態を寫
去又揚雄の妻潘巧雲が裴如海と奸通の事あり如し這潘金蓮潘巧雲西門
啓裴如海等の毒惡惨刺罪死を容ざる鏡鴉虎狼の大惡人之這其夫淫婦等
不義の淫慾不軌の身と看官羨考思ふ便是勸懲不係る所後の其淫

戒る作者の隱微と精采一是よりして下冷山平燕を師とて才子佳人の奇遇を作
了設する者近日舶来の小説も特小多好速修柳鶯鸞の如は儂盡まづもわ
ど孰も相似て時好媚さるるわねども然しも只其真情を寫して淫奔猥褻を筆と
要せむ則是本傳を信乃と濱路の情態を見て思ふ其情態不好人と夕人の
けちめ
差別あり又本傳を麓山縁連と船虫と竹林巽と於免子の如は皆是水滸
潘金蓮西門啓等を作り設て邪淫の戒ある者一心操同ト況や美少年録
る陶朱之助が荒淫の甚しきを予が筆尖似けるしと看官思ひ予が本意亦
ら那朱之助の後陶晴賢と成登るは叛逆の大惡人他が少年なり時淫
奔ると是れ誰か晴賢とらんとも願ふは是も亦勸懲不係るよりあると思ふ只
善人もあらず惡人もあらず貴人の公子閨門の麗人及市井の男女の齟齬を鏡に相援
は野合の淫樂の痴情を宗と寫る者誨淫導慾するところなるべし

せざる所を昔孔子の詩を削るや猶淫性の詞を遺して其文も盡きざりて後戒を
無るへ又心誅の文法を以て春秋を作る及びて乱臣賊子の怕れ三果敢る
稗史物の本とも字句の餘力を以てせる真の作者の心操を見まわれば
本傳より定正顯定成氏の如く皆暴惡暗愚の君なるも酷く敗れて作り
あし看官誅しく思ふもあべ。彼定正顯定其先世主君持氏を弑し且乱世
蔽不棄して京都将軍の命令として持氏の幼息春王安王を生拘り害して且故
君の職を横領する。不義逆惡の心あり定正顯定其兒孫として大職を承續
徳を脩めて先世の罪を償ふ欲せし成氏を攻伐走して君臣順逆の
義をえくらむ。刺肩谷定正最後仇の証言と信容れて持氏入道道權を
誅す。兵權の衰へて子孫凋落せざることを欲する。本傳より敗れて
愚將を成氏如く冤家の為に立られ。時教を知らぬ。凶悪の心誅して録

倉と追ひされ。許我を得りて其城をも顯定が破られて千五百高居あされも
仁義を以て家と自らしと知む先父持氏の弑逆の逢る乃祖尊氏の下剋上の餘
殃るを悟らざり。不賢を以て敗る意衰の清の逸田史の女仙外史の所謂
春秋心誅の筆の效ふとのん。鳥許かきかべけれども。餘も本傳の原成敗あり。知る
人を知るべし。又本傳の經文聖教を雜識あり。人或は誣咎めて物の本あり。あべ。原
かて。經文聖教を慢侮を學教僻事と。嘆ふ賢もある。志と異。本傳の新
奇の小説るれも其仁義と説の善惡と辨する。小至りての虚実の二あるべし。四
書五經の一言一句も字のさる。婦幼も本傳を愛讀序の序。其經文聖語の尊を
知るあり。且感。且悟りて。字の道。志。人。あ。思。是。老。波。深。切。り。
言。儒。經。不。及。び。る。不。聖。語。を。慢。侮。せ。用。捨。の。看。官。の。隨。意。る。べし。
時。己。亥。の。秋。采。月。著。作。堂。の。南。窓。静。坐。り。て。本。傳。の。作。者。み。つ。評



南總里見八代傳第九輯下帙之下乙號中套編目錄

卷之
三
第百五十四回

百中賣卜倡兩將
風外風術招撰

卷之
三
第百五十五回

豐俊得時請恩赦
妙真愁想入軍役

卷之
四上
第百五十六回

貞行託奧留釋子
毛野明察免死囚

卷之
四上
第百五十七回

上總民孝義稟再恩
安房侯仁心定軍令

三
第百五十八回

瀧田三使獻生拘

四下
第百五十八回

扇谷間諜導假使

卷之
三
第百五十九回

助友忠誠代父志
信隆機變借旗兵

卷之
五上
第百六十回

衛士相桃兩枝花
名將許容內應質

三
第百六十一回

重時逢異同兩生
義任凜人先之勇

五下

自是之下至第百七十回將結局云其後板者
五冊近日又復續出焉則全壁大團圓

南總里見八代傳第九輯下帙之下乙號編中套目錄終



武田左京亮信隆
 磯崎増松
 有親

武田左京亮信隆
 磯崎増松
 有親

磯崎増松
 有親

八代轉九郎

文政堂藏



賢童五里
 巷
 貝宮莫佳
 人

安西就介景重

人魚

八代轉九郎

文政堂藏



貌姑姫

大い

ころあし
池のな何
みか岡を
貌姑射の
箱もま
著作堂

天津九三四郎員明

ホリ百次郎

八傳九傳卷三十一

八甲

文楽堂蔵



勁風盪艦
甘雨洗干

皇

祭

大石源左衛門尉
憲儀

仁田山晋武佐

八傳九傳卷三十一

文楽堂蔵

自評餘論

或云近曾文人の好事る。江戸を東都と書て是ハ國字を施く。アツ
マノミヤコと讀せざるあり。遮莫みやこハ皇居の地をいへ。武藏の古より皇
居の地ハありぬ。みやこと稱するハ僻事と云。國學者流の辨論あり。そ
翁も知れるるべし。然るに公羽の作る物の本毎ハ東都曲亭云云と録し
あるハ僻事ハありまじ。と註するハ予答ていへり。然るに皇居の地をみやこと稱
するハみやことその畧ハ省ハ是ハ都字と借用するハ漢土にて天子の居
所を都といへん。かれども都の字義ハ猶ヨリ。正字通ハ天子所居
曰都。又十邑曰都。又邑都名相通。周禮距國五百里爲
都。又總也。聚也。皆也。歎美辭也。凡言俱者曰都。又麗也。
閑雅也。と注し。學者の知る所なれば。具ハせを只其要と摘む。是ハ

由てこれを規。和漢其差あるあり。都の和訓みやことる。スヘテといふも用ひ
たり。去てハ則都會の義ハ然ハ東都と書てアツマミヤコと讀するハ僻事と云
いれけぬ。已ハ東都を字音也。則是をトウトと讀て東の都會目といふハ用ひ
あかしのいふも唐山ハ東都西京の稱あり。又天朝ハ中葉より南樂と
南都といふハ東都を字立。易隨ハ讀むも都をみやこと義と。思ふ者
らハ然るに都會の都と云ふハ牽強傳會と云ふ理論あり。然るに其
頭の論義ハ物ト云へ。抑吾作れる物の本ハ皆是之根の小説也。而正
くもるハ技を作者の本貫と録するハ胡意江戸といふ。則東都と稱
たり。其の故ハ名號も曲亭主人と自稱し。玄同頼鳥家岡と云一二の雅號を
り。著者ハ予ハ別號のハトヨリ。其の中ハ馬琴曲亭の二稱を始より。是
戲墨ハ用ひられる賤號ハ名號ハ其の用心あり。地名ハ亦其の心あり

んや。ある人るどて猜せざりける。予が編集主同放言の餘も真面目の隨筆
必姓名と見りて則江門と録し。敢請世間億兆の君子物よりて予が
用意の差別あると思ふべし。五口少りし時行心。只の一技小西驍されより名
利の奴を収めたる名の不可を今悔て及び既中て痛く老らる。大部かくの如た物の
本と二つ作りかゝるべくか。かゝるのゆゑも。今或向微らる。後の人吾用意を
悟と必論するもあらんと思ふる。小自評と俱小又其の編と附記して。ゆく後の
譏嘲と解まざる多辯の徳の害んと云。文中子の為と恥べし。

○前板 第九輯巻の二十九百四十六 五冊中の亦校訂の送漏あるべし。と思へども今
あ五冊を稿ト果るまで前板の彫畫を告る。二冊成を告る。倉卒小
披閱をぬふの。何ぞ今再訂小由ある。を又後板巻の二十六第百二十
二回の小端録まべし。

自評餘論終

南總里見八犬傳第九輯卷之三十三

東都 曲亭主人編次

第百二十四回 百中賣ト兩將を倡ふ

風外風術巽二を招く

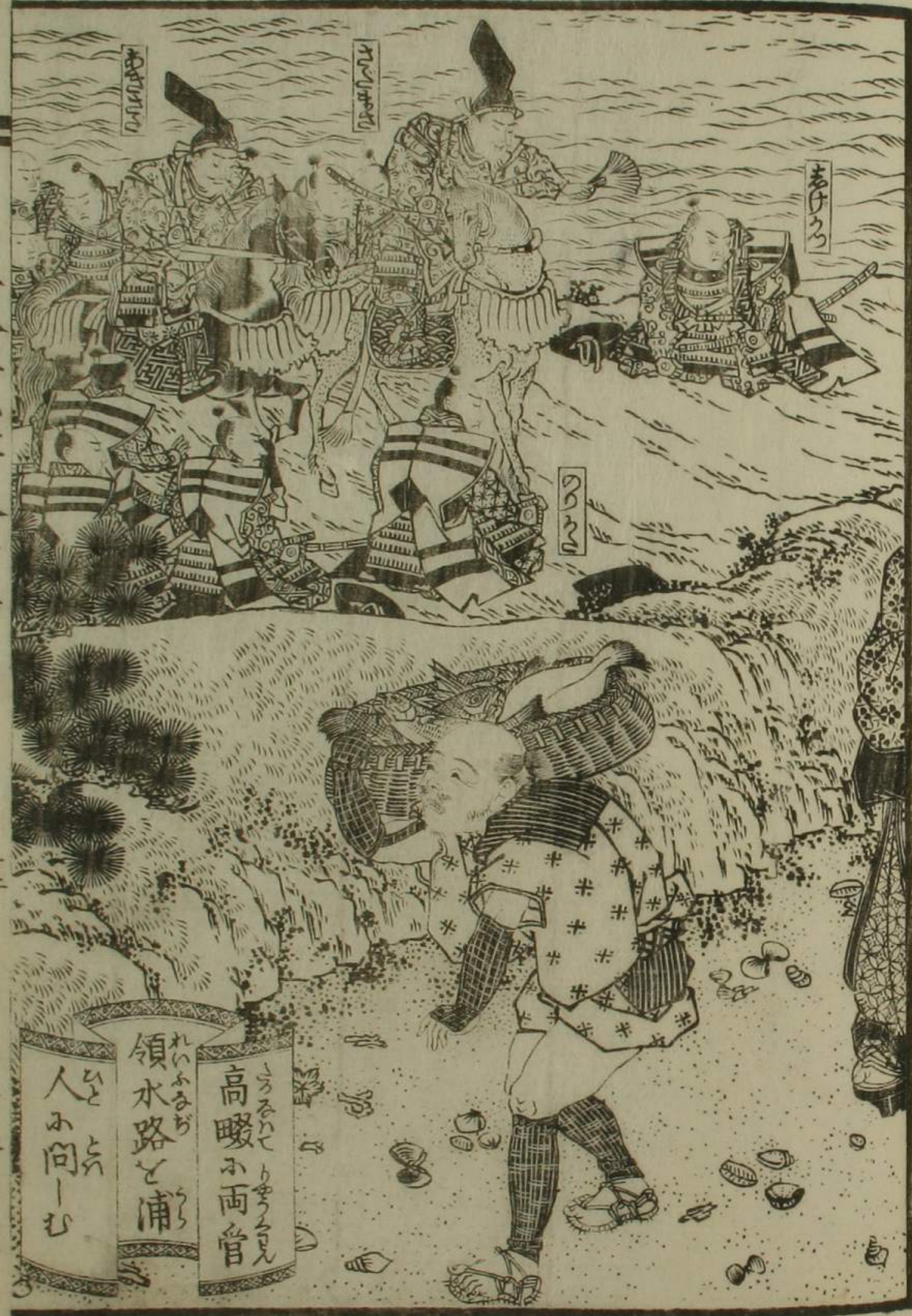
先説五十子の城内内既小して十一月も末二三日のり候より。約束の諸侯
來會して士卒第二郭を克満らる。中管領兵部大輔山内頭定八家
臣齋藤兵衛佐高実。山内の館を守らせ。嫡男上杉五郎憲房と共小
軍兵一萬餘騎を従へ。十二月朔日。鎌倉を打立て三日の五十子來會と相
従ふ。兩大夫白石城介重勝。小幡木三頭東良。隊兵各千五百餘騎共小一
萬二千餘騎先六御河の上。到て定正と會盟あり。其事畢て五十子の城へ迎へ。三
隊の軍兵も入る。堪む。尚大森陣を。這他足利左兵衛尉成氏二千餘騎。

千葉新介自胤一千餘騎長尾判官景春二千餘騎兼大刀自の代軍船戶津
 衛由充十五百餘騎摠大将肩谷修理大夫定正七千餘騎定正の庶長子式
 部少輔朝寧一千餘騎嫡子五郎朝良千五百餘騎大石石見守憲重千二
 百餘騎其子源左衛門尉憲儀五百餘騎又近國近郡の野武士們招るる集
 來。頭定正の隊不附く者殊不歟。一かれば都て五六萬騎及び偽
 一七十萬餘騎と唱ふるの内長尾景春の既出陣の報ありといふ。胡意中途
 淹留といふ。五十子の城に至らば又待我の足利成氏。初大石憲儀摠大将
 仰んといふ言の馮心。且横堀在村不薦ゆられて任く五十子の城。來會を
 頭定の取成氏を敬む。動もされ勢い無一。空礼る舉動。成氏あるを
 憤りて去る。又世の人の嘲諷の有。影護けん。獨安くら。會を
 押へ。默然として在る。程の十二月三日に至る。定正頭定諸將を集合て水陸の

軍評定あり。登時定正謀りていへ。我意不。今柴浦より安房上總へ一草
 あり。渡るべ。然らば順風宜に日多。大小の戦艦。一時安房へ推渡ら
 べ。唾して義成を虜せむ。日多。敵の士卒を分入。陸下總多。困
 府臺。或中川行徳津。二の大將を遣して。下總を各上總不到ら。我陸と水と
 大兵相合。敵の前後を防ぐ。由多。兎を脱。鋒を倒して。皆降え。願へ。あ
 議。什麼と勢い猛く。今令。如く説示。頭定。頭を掉。其計好とい
 ども。我大兵江を渡。敵も亦船を浮。逆。防戦。且敵の海邊。家を
 ま。水戦。熟る者。然。況や。今。真中。寒。威。折。士
 卒の。脚。船の上。梯。必。自由。多。思。甚。難。大石
 憲重。找。出。而。侯。御。論。孰。是。其。理。然。江。渡。敵。一時
 亡。と。憚。順。風。烈。折。待。風。上。火。放。敵。焼。く。

考くとも。昔唐山三國の時兵の周瑜が曲日操の大軍を克ける。只風と火の勢
 助ふ据れり。その美を思ひ召れむ。と云を願定らむ。然之火攻のなり。我亦始
 よる思ひまふ。あつた。二八月の時候。風烈。日の冥。前月より。今日まで。浦
 浦風暴。茶。日。稀。尚。幸。二。四。日。の。内。烈。火。順。風。あり。我。火。を。放。つ。時。及。び。其。風。猛。可。吹。替。ふ。反。て。躬。方。の。船。を。焼。く。べ。開。亦。危。殆。と。論。て。果。つ。べ。も
 申。され。定。正。一。要。時。沈。吟。下。て。大。輔。殿。の。談。論。の。遠。慮。過。る。躬。方。武
 運。稱。公。風。も。吹。く。替。ふ。明。日。柴。浦。へ。立。出。て。那。地。へ。渡。る。遠。近。を。地。方。の
 民。小。尋。問。必。便。宜。と。ゆ。う。と。あ。ん。今。や。狐。疑。ま。ら。ん。と。云。を。諾。る。一。座。の。諸。將
 成。氏。自。胤。朝。寧。朝。良。憲。房。と。首。を。白。石。重。勝。小。幡。東。良。大。石。憲。重。並。葉。憲
 儀。稻。戸。津。衛。由。充。ま。る。大。家。の。謀。計。從。ひ。け。り。然。而。其。次。の。日。定。正。願。定。大。石。憲
 儀。白。石。重。勝。以。下。士。卒。と。僅。小。百。名。許。を。從。へ。俱。小。城。を。出。馬。を。找。く。柴。濱。高

暇の浦邊より眺望。則浦人を召よせて。這里より安房上總へ渡る。水路の
 遠近を問せける。浦人答て。然し。い。より。上。總。の。木。更。津。まで。水路。十六。里。一。里。い
 る。と。便。路。の。一。は。扁。舟。を。渡。る。も。一。夜。に。到。る。他。尙。前。面。高。く。峙。立
 たる。安。房。の。鋸。山。と。い。那。山。の。邊。を。海。濱。まで。八。九。里。の。り。え。れ。る。も。横。走。る。船。の
 特。に。危。危。者。る。渡。ま。者。の。い。は。洲。崎。に。猶。右。方。り。て。あ。り。斜。に。十。餘。里。許。あ
 る。を。他。領。を。漁。網。も。那。浦。近。く。這。浦。より。船。を。寄。せ。む。い。は。詳。知。と。い
 け。登。時。一。個。の。賣。下。氏。の。編。笠。深。く。戴。る。身。の。涅。染。の。太。絹。の。故。る。小。袖。を
 被。て。朱。鞆。の。一。刀。を。腰。に。跨。へ。磯。馴。松。の。下。る。平。岳。小。尻。を。掛。て。小。机。の。上。易。經。と
 卦。木。と。筭。子。立。る。筮。竹。あり。又。紙。小。拾。り。裏。錢。二。四。あり。の。相。距。る。と。遠。く。今
 浦。人。の。家。の。具。更。少。を。見。忽。地。高。く。咳。れ。て。當。卦。本。卦。吉。凶。悔。吝。方。位。宅。相
 勝。敗。利。害。我。占。妙。々。百。筮。百。中。問。せ。ぬ。や。と。喚。る。聲。耳。定。正。驚。見。り。之。願



定まのさらう人ひと疑うたがふとれい必かな惑まよへら其その疑うたがひを決けしま惑まよひを解とくと為なるま周しゅう易ぎのよ如ごとくもうる所ところ
 折をりし那な里りのよ賣うりし兒このよ召よびしてし試しみし向むかふととし小こ顯けん定てい異い議ぎももくく伴ばんのよ近きん習じゆ小こ分ぶん
 付つてた他たをを召よびしてし召よびしるる小こ賣うりし氏しのよ何なに容ゆるさる色いろもも徐じゆ小こ編へん坐ざをを脱だ捨するととしままへへ
 年ねん尚なほ二に十じゆ不ふ至しるる眉まゆ秀う面めん白しろくく星せい眼がん高こう鼻び丹たん花かのよ辰ちん骨こつ並ならぶる甄けん允ゆん仁にのよ像ざう
 耳みみのよ厚あくく長ながくく乃すなはちち不ふ似にうらげる相さう貌ぼう堂どう々々ととてて賤けん一いつ々々とと威い風ふう猛まう々々とともも
 悔くりしかたたた這こ個こ路ろ備びのよ生せい活かつ見けん引ひれて定てい正せい顯けん定ていのよ馬ば前ぜん近きん々々ととてて跪かくく時とき十じゆ石せき
 憲けん儀ぎ找たしし出いででややれれ賣うりし兒このよ姓せい名な何なにとと生せいれるる這こ里りのよ出いでで御ご大だい將しやうのよ則すなはち
 是こゝ関かん東とうのよ西せい管くわん領りやうをを御ご坐ざをを目め今いま汝にのよみみららるる尋じんねねのよ美みああるるをを詳しょう小こ御ご
 美み京きやう一いつねねのよ約やく々々とと宣のたまふふ賣うりし氏し答こたへへ申まをすす仰おほせせるる人ひと數かずをを在あるる
 下かのよ赤せき岳がく百ひやく中ちゆうとと喚わん做ぞるる浮う浪らう人にんでで生せい活かつのよ為ためにに比ひししりり這こ頭とう小こ旅りょ宿しゆく一いつひひ
 易い好こうむむ所ところ也や年ねん來きた学がく得えけけいい何なにのよままれれ問もんせせ也や判はん断だん仕しりりひひ久くとといいをを定てい正せいううち

定てい正せい顯けん定ていとと共とも侶りよ小こ馬ばをを下くだりり見けん見けん不ふ掛かりりてて百ひやく中ちゆう向むかひひてて後のち其その漢かん子し我われ今いま
 爾なんがが一いつ筆ひつとと買かひひてて宿しゆく望ぼう成せい就じゆうをを不ふ也や其その吉きち凶きゆうをを知しりり欲よくききとと請これれてて百ひやく中ちゆう毫ご
 も擬ぎ議ぎ其その美みのよ心こゝろとと心こゝろ一いつ霎しやく時とき眼がんをを閉してて袖そでのよ内うちをを占うらひひ果はてて竟や然ぜんとと為なりり辨べん
 々々とと卦け面めん極ごく々々とと大だい吉きちとと巽しん為ゐ風ふう三さんををののてて以も其その巽しんをを順じゆん々々とと入いるる逆さか々々とと
 討うちちてて敵てき國こく入いるるのよ美み也や且かつ其その象さうハハ則すなはちち風ふう是こゝをを八は方ほう配はいれればば則すなはちち是こゝ辰ちん巳しとと也や
 又また其その字じのよ形かたち々々とと巳し兩りやう箇こ並なら立たてて共とも做ぞるる美み也や抑おさへへ尊そん公こう御ご西せい所しよ和わ睦ぼく合がっ
 體たい々々とと辰ちん巳しのよ方ほう里り見けん氏しをを討うちち謀まりり也や所ところ其その二に卦け至しれれりり畫え畫え也や且かつ江かうをを渡わた
 々々とと水みづ路ろ々々とと安あん房ぼう入いるる欲よくりり也や則すなはちち巽しんのよ辰ちん巳しにに入いるる美み也や稱せう々々とと知し又また巽しんをを
 風ふうをを聞き戦せんのよ時とき臨りん々々とと順じゆん風ふう起おききてて御ご船せんをを移うつりり君きみ子このよ德とくをを風ふうををてて敵てきのよ小こ人にんのよ
 加かええぬぬ草くさもも木きもも皆みな靡み々々とと偃えん人にんのよ必かなととままべべ何なにのよ御ご疑うたがひひ公こうとと言い詳しょう小こ説せつ論ろん
 廿に六じゆ定てい正せい顯けん定ていのよ合がっ々々とと亦また百ひやく中ちゆう向むかひひてて公こうをを判はん断だん既すでににああるるをを約やく

たり。幸ひやてよく當ふ賞禄の必しと云儘せん然るる。欲す順風ありとく其
 風烈しうされば謀る所かひるん且其風の何時候吹くや吹く必列隊や向ふ百中然
 い辰の敷の五之巳の敷の即四より四五干日待されんをいふ。と云れ願定飲を
 定正を定めて和殿のいふ思ひぬ。數萬の軍兵既集合あるト筈と空鷹にて徒
 日過六戰飯竭て叛く者あらん然るに勞して功を不便事と吐け定正亦
 樂も俱百中あらん向ひや百中。汝の易ふ妙をいふ風を自由ふ口ふ術に於て
 申ふ千金の敷しと云。邦助あるねと懇懃に請れて百中答るや。御説餘説を
 くいふも在下の天地を動さざる術者あらん師のいふ風外道人と其法術を量
 る。鬼神を役し風を口で雲を起し雨を降さ其妙其術古の役小角伯仲せ
 然るにれも道人の塵交り。術を賣る。年来遊姑峯山居くいふ偶這
 頭隠遊びて今の谷山は在まの師は就て順風と云ふをいふや。御本意の

如くふるるの設く儘のえ。と云。在下御道と申んと云言皆便宜言はれ定正願
 定飲に堪はず。徑不其師を訪ん却何を齎せんと向を百中申す。否師の
 寡欲するもの。紙一枚でも報いを受。請る者あるべし。則沐浴存戒て必され對
 面を饒され。遮莫猛可の御登山。御伴當代垢離と云。を那里へい
 がせ。と云。兩將然り容て欣然とて敢遲擬せ。隨即伴の近習を口で若
 們の兩之名今唯名代。海に浸り潮垢離執り。俱深信祈請て迹より
 谷山へ來ると分付れ。百中の退。易經筮竹の餘の東西まで皆袂に裏て懐
 ち。小机の脚を折枉て引提て來る程。雜兵代りて携りゆり。悠而定正願定ら
 各馬より乗り。白石重勝大石憲儀以下の伴の士卒と皆從へて赤品百中を
 先立。早く谷山へ來よけれ。百中則相敬言めて定正願定下馬させ。主立其
 く登るを饒さ。又只重勝と憲儀と兩家の近習五六名を從せて俱ふ山に登る

程不常葉樹の多不敏なり。椋る。這山の平腹は上古の穴居の迹と云ふ。一箇の
 横穴ありけり。洞内小菰。蓬才一枚布て。端然と結跏趺坐する。一個の衰法
 師居り。形貌瘦て。千歳の松の如く。脚の細く。蟠る竹根に似たり。髪黒く。又
 白く。毛既二毛と見ると。元頭髪も亦伸る。身が故り。單の洋衣と被る。海
 松の像く。破れ撥垂る。黒漆の麻の裳法衣と纏ひ。眼と閉て。合掌する。开身
 邊。赤髑髏灰を装て。香爐代。小焼る。林香の煙。靡る。消る。起り。雷下
 赤岳百中。且定正顯定主。從を樹下。立在せ。軍洞の内。杖を向ひて。跪にけ
 報る。師父我百中。目今還り。いと。風外ら。眼と睜に。領に。百中。然爾
 る。と。今日。むら。か。る。事。早。く。や。向。へ。百中。然。い。御。高。曠。を。憶。り。く。
 扇谷山内の両管領の為。一筆を布け。折言師父の上。及び。憑る。美。ひ。只。得
 俱して。参り。其。故。の。箇。様。々。々。倭。々。い。と。今。番。定。正。顯。定。和。睦。合。體。一。里。見。

亡さま。欲。ま。る。小。自家。の大。軍。水。路。を。渡。して。敵。と。火。攻。し。做。末。去。る。其。折。自。由。の
 爲。に。則。列。の。順。風。之。因。り。師。父。の。風。と。求。る。と。其。望。の。趣。を。告。げ。風。外。頭。と。掉
 了。と。又。要。る。紹。介。へ。我。術。風。と。自。由。の。事。も。人。を。害。して。土。地。を。奪。ふ。其。惡
 強。人。は。異。る。を。然。る。殺。伐。を。資。ん。や。去。ね。の。事。と。叱。る。百中。推。返。して。仰。理。の。不
 以。も。征。伐。開。戦。の。武。の。道。之。况。他。の。逆。に。我。の。順。風。之。則。我。順。を。の。那。逆。を。討。た。ハ
 州。是。より。平。治。して。國民。塗。炭。と。免。れ。ん。枉。て。而。を。容。れ。ぬ。と。口。説。け。定。正。顯。定。も
 共。侶。洞。門。に。杖。を。寄。り。揮。して。道。人。唯。言。是。關。東。の。両。管。領。之。み。ら。る。小。願。問。へ。る
 心。の。誠。を。照。査。あ。ら。願。ひ。を。慥。へ。ぬ。か。い。と。と。請。求。れ。風。外。道。人。嘆。息。を。氣。に。く
 去。ら。ん。非。是。非。及。び。我。の。風。を。起。し。せ。ん。欲。ま。る。方。の。西。欽。東。欽。本。月。幾。日。江。を
 渡。ま。と。向。て。定。正。答。る。や。風。の。乾。を。順。風。と。も。烈。烈。を。願。へ。も。酷。く。猛。烈。る。く。ハ
 自家。の。船。を。覆。え。然。が。疾。く。を。緩。く。を。程。と。吹。て。変。る。と。始。終。乾。を。大。利。と

其の顯定も亦多き。諸方の軍兵催促に従ざる者あると云れり。咸五十子充
 満ち。其の陣せき欲む四五日の内、吉日あり。と問へば、風外指を折て、今日の十二
 月四日、今よりして四日後、八日、黄道大吉日、乾よりして、其の入りて、事を計ふ大
 利あり。本月八日の辰牌より、端の乾風を起して、當晩亥中、不至りて、休むべし。と云り
 其の猶疑多く、心許る思れん先や、試み我本事と示さん。這方へ來ませと身を
 起し、洞門より立出く。山の頂、不攀登れ、定正顯定以下の毎、重勝憲儀、面
 家の伴當百中と共、侶不相從、さて、陞りける。登時、風外道人、立る、隨、乾、朝
 ひく、懐より細小る。錦の裏物を合、出く。一霎時、額、推當て、眼を閉、呪文を
 唱へて、軀、件の裏物を合、直々、招く程、怪む。乾の方より、疾風、忽、馬と音
 未、來て、砂礫を賜け、樹を鳴らせ、定正顯定、伴當門まで、吹、墜、され、と、石、不、推、り、
 或の葛藤、枯、芒、化、不、縹、附、て、一、霎、時、を、在、り、け、れ、久、く、堪、え、難、勢、ひ、る、定、正

顯定、聲、共、侶、不、從、名、道、人、本、事、の、知、ぬ、願、ふ、風、を、歌、め、の、な、り、納、め、と、叫、ぶ、風
 外、然、と、と、合、矢、の、更、又、呪、文、を、唱、く。裏、懐、來、れ、姑、且、て、風、歇、て、塵、も、動、け、
 る。一、刻、憲、儀、重、勝、以、下、の、伴、當、ま、で、駭、に、嘆、り、て、天、を、瞻、定、正、顯、定、の、共、侶、の、貌、を
 更、の、塵、を、拂、ひ、て、謹、く、風、外、に、朝、ひ、て、飲、び、を、陳、て、い、ふ。師、の、寔、の、神、仙、之、既、奇、風、の
 幫助、あれ、敵、と、火、攻、の、計、成、り、て、義、成、父、子、と、虜、の、あ、つ、く、憎、し、思、ふ、惡、八、大、士、皆
 敵、り、軍、門、は、集、ん、る。翌、日、四、男、外、を、出、さ、す。凱、旋、の、折、又、あ、り、來、り、拜、見、し、法
 恩、の、報、い、し、ま、け、れ、と、い、ふ。風、外、は、不、言、下、我、の、人、の、為、偶、小、術、を、施、せ、し、も、報
 ひ、を、思、ふ、者、不、あ、る。然、ら、ば、那、風、を、起、し、次、の、日、あ、り、立、去、り、舊、山、還、る、へ、西、公、掛
 念、る、ま、あ、り、又、對、面、の、折、る、ま、ん、の、只、我、弟、子、百、中、と、權、且、西、公、の、從、せ、ん、他、が、親、赤
 岳、其、甲、の、伊、豆、の、堀、越、の、御、所、足利の、舊、臣、を、死、介、る、先、君、卒、去、の、折、伊、勢、新、九
 郎、長、氏、の、襲、れ、て、城、地、を、失、ひ、ぬ、る、那、身、の、則、退、隱、し、て、相、摸、の、武、澤、に、居、り、夫、婦



谷山小風
 外房總の
 便路と指
 南

猛可まゝ百中ひやくちゆうが惣所そうじよを準備じゆんび多く夕饌ゆせき中酒ちゆうしゆを薦すすめるとも。余程あま不定ふじやう正頭せいとう
 定さだの日の日ひ在城ざいじやうの諸將しよしやうをも赤岳あかたけ百中ひやくちゆうが事の顛末てんまつ其師そのし風外ふうがいが奇風きふうの吉きち又また
 情なさけやう小生せうせい告知こちされぬ大家だいじん感かん下げ且かつ扶たすひく憑たもつく思おもひぬる。左右さうぶも程ほどの暮くれけれ。
 定さだ正頭せいとう定さだ同席どうせきを憲重けんじゆう憲儀けんぎ東良とうりやう重勝じゆうしやうも四個よんこの大夫たいふをの侍さむらいを那風なふう外がい
 が教しゆ小据せうしよる水戦みづいくさの密議ひみつぎも。則すなはち赤岳あかたけ百中ひやくちゆうを這席このせきへ召寄めいよせし猶疑なほぎたるを向むか
 試しる小百中せうひやくちゆうは是これを辨わべん。意表いひょう小生せうせいとまらる其言果そのごんく又また百中ひやくちゆうが公こうの敷しき
 らねども我われ未ま生せいを御ご師しの告つ旨しめ示しまへ。公こう隱ひそまへうもひまを就つぐ又一また一議いつぎはり愚父ぐふ
 が故朋こほう輩はいる。其兵そのへい毎まいの子弟こていの武藝ぶぎも男悍おとたけ人ひと小勝せうしやうれも良主りやうしゆ小遇せうご孫そんが
 世よを托たくて皆野みな武士ぶしのりる。今いまも親おやの由縁ゆゑんも。在下そのげと刎頸あきまの交まじり孰せつも切せつ
 る兵へい毎まい甲かし女に慮りよ百有餘ひやくいうゑ名な貌ぼう姑こ峯かみ多た武澤ぶさくの間ま居ゐり。他た等らハ伊豆いづの海うみ
 邊へ小生せうせい百有餘ひやくいうゑ皆水戦みなみづいくさ孰せつも公こう在下そのげ兩りやう三日さんじつ身みの暇ひまを賜たまひて夜よを自みづか接せつて。

那地なぢ不到ふたうりて薦すすめ御方ごほう小俱せうぐく。水戦みづいくさの時とき小臨せうりんも。必かなく做なさる。あ
 ずく千騎せんきの勇士ゆうし小勝せうしやうるべし。公こうを定さだ正せいうちまてそを要えうあるとまらる。既すで小出陣せうしゆじんの
 日ひとト定さだめ。八日やちじつの程ほどもあま。其期そのき小合あひ欽きん甚し麻まも。と向むかへ百中ひやくちゆう然ぜんに
 在下そのげ那死な友とも等らと伴ともして徑みち小相さう摸もる。新井しんせいの城しろへ赴むかひて船ふね二三十艘にじゅうさんぶね借かり。必
 八日やちじつの閉戦へいせん小先せうせん駈かを仕つかへ。那里そのこゝの城しろ王わう三浦さんぷ殿てんへ。其船そのふね毎まい小柴せ硝せう硝せう火か
 積つ入れて百中ひやくちゆう小渡わたと。仰遣おほせつひか。と請こふを定さだ正せい左右さうぶも。饒にぎさも先頭せんとう
 定さだと商量じやうりやうして且かつ憲重けんじゆう憲儀けんぎ東良とうりやう重勝じゆうしやうも小意見せうごいと向むかふ。四老しろう臣しんの別議べつぎも。
 皆便宜みなべんぎのふと。登時とうじ頭定とうじやう百中ひやくちゆう向むかひ。目今いまの一議いつぎ定さだ便宜べんぎ。我軍わがぐん兵へい多た
 事ことのへとも。水戦みづいくさ小熟せうじやくる。稀まれに熟じやくる。汝なんぢ們ら先鋒せんぽう小找せうも。便宜べんぎのふと。べし。
 汝なんぢが船ふねを借かり。欲ほむ。新井しんせいも我屬わがしやく城しろも。那里そのこゝの城しろ王わう三浦さんぷ陸奥りくお守し義ぎ同
 父ちち丁ていの世よ小知せうちれる。勇士ゆうし多た。水戦みづいくさ小熟せうじやくる。必かなく是これを定さだ正せい左右さうぶも。明日あした使者しやと

るりけり。倭而白石城介重勝ハ百中をねり退りて。隨即付印と航幡を
遞與まゝ。百中をれを受合ひて。辭し退りて。權且枕小就く
程不既。曉天より。熟睡もせむ。起出く。隸僕が差置ぬ。早飯を
喫果て。遽しく身装ら。付印を焚足と懐不來め。又袱小裏と。航
幡を背に駝ふ。則件の隸僕を。案内ふ。舟城の角門より出
去り。鳥夜不乗。いそ程不先谷山不赴。洞門より。吸内余風外ハ
既不起出。落葉を集め。焼々居り。今百中が來ぬを見。招入。首
尾を問ふ。百中ハ。昨宵定正顯定。説薦め。付印と航幡を。約
事の顛末。其々報知。ま。風外。少々領。開ら。と。此。再
使もあむ。その折。ま。不在。一。要時。密談。り。け。這。風外。道人。百
中。虚。實。救。看。官。作者。の。分。解。を。俟。各。猜。し。知。れ。る。事。

第五十五回 豊俊時を得て恩赦を請ふ
妙真愁懇して軍役に入る

是より先大阪毛野胤智那夜女、大法師と大村大角を。悄地不快。船ふち
乗せ。武藏の柴濱へ遣。け。詰朝。單伴當を。從。稻村の城。か。る。隨。御
義成王。不。見。參。して。昨日。大角と。共。侶。不。大法師。不。説。薦。め。件。の。僧。俗。を。投。ま
方へ遣。ける。事。の。首。尾。を。詳。め。上。げ。け。美。我。成。王。欽。び。て。あ。る。百。八。人。の
筆。計。必。是。成。る。べ。と。毛。野。が。奇。才。と。感。せ。る。當。下。毛。野。又。京。を。さ。う。臣。等。が。既。不
計。る。所。ハ。僥。幸。と。願。ふ。似。く。い。ま。必。と。い。ふ。何。と。さ。大。角。則。那。地。不。在。り。と。賣
ト。と。敵。を。倡。ひ。欺。く。時。只。那。城。内。の。毎。不。便。さ。く。欲。さ。る。も。開。戦。の。折。ま。不。餘。日
不。那。城。兵。不。親。愛。せ。ら。る。便。宜。速。不。あ。る。べ。と。又。竟。不。遇。ふ。り。な。く。事
徒。不。る。べ。や。前。も。知。り。た。所。不。い。へ。却。危。し。と。い。ふ。と。義。成。王。領。り。て

そ其も理りある言るがう那秋毎小禽を捉る者に見よ必あへ友鳥の渡るべし
 豫より相定ゆるふわねども媒鳥を出し措くと死の野の鳥早く其聲耳を鳴り
 遙く暮春以来て掛る羽筆小粘ぬる況戰場小蒞む者ハ是存亡の境ハ
 然ハ那城内の士卒ハや大將品する者とも吉凶禍福を占問んとく必
 末々大角が掛る四の吉貝ト粘ぬ掛る者あつて已死汝ハ逆是をのうと
 思量り一所ゆるんを尚危しと卑下を為す才の誇らぬ萬一の小心ハそ
 あらむむとめと解れて毛野の額を衝く湖江疏の至當至妙又高はたさ
 もる一良むのそそい就て大角が掃る所既ハゆれぬ情地まは進仕ハ送り
 幼中洲崎の快船ハ那地を便宜の浦に留措く該ハゆれぬ船どそゆえ上
 けてハ然ハ其告あつむ折智勇兼備りる一個の兵頭ハ遣兵百五六十名
 皆楫取の技ハ熟しるを従せし情地ハ那地ハ遣大角より敵と欺はる

たりとも入足等の帮助をればゆいぐ死所ありといハ義成主又領はる開も亦我
 よくあらるる其折大角の帮助を死兵頭ハ堀内雜魚太郎貞住ハ宜
 々々他ハ量義ハ貞仍ハ従ふ千代九圖書助豊俊並ハ真里谷武田ハ征伐の
 折ハ尤ハ戦功あり然れども其武勇ハ誇るを都て貞仍の指揮ハ據りて
 せざるにあらとゆ死他ハ上總ハ所要ありて推津の城ハ在留をぬれハの恩劇を
 ぞ知りて必急死かり來るべし其見夫の折情地ハ命せん然りとも人ハ望むと
 向れて毛野又答るる那堀内貞住のりも臣等ハ傳言ハゆいハも実ハ一人當今ハ
 勇士多しハ豫知る所ハ其御撰擇ハ優む者ハゆいハへお義成主ハ合ハ天々
 就て亦一議あり素藤ハ逆徒ハり那千代九豊俊ハ量義ハ貞仍ハ直元ハ生拘
 下ハあける折我思ふハわれハそ儘那身を貞仍ハ閑け置られハ今ハ猶圍圍中ハ
 在ハるハ不豊俊ハ先非ハ悔て則堂管貞仍ハ父子ハ就て只管ハ恩赦ハ願へり

と言町寧下仰先毛野の悦び兼て多々死御仁政の上の元但
 件の御使を臣等一個奉らん外の人もあつたの義兄弟の内誰をも又一人を
 添さるの豊後愈兼服して計策に従ふと稟し他よりあつた敵方へ情地の
 遣ま使の千代九代九代舊臣の宅眷と伴して音音曳る軍節をそそ相応しく
 受け他等も是は流るる武藏の水邊小生有る今戦世の俗習も
 船の上の掙は自由とせらる。と豫めける勇婦毎に必成まのめん然れども
 其密使を遣まし只今の尚早より敵の這方へ艦を找る一兩日前そそけれ事
 急なる折し思ひの急候ひあり敵の思慮ある者といふも必や信容れ疑ふ
 暇をなべ。信れはをさむいへも先音音曳ると口をせむして臣等と俱に情やう
 貞の許遣し音音曳る則豊後對面す。送ら面善くをいふも後
 事と謀る折し不便のそゆめ。と言送るも請ふ毎に義成主謀るもそ

美の我々もあらる。遮莫音音曳を召するは是密策の上なる物々あり有
 司の下知も龍田へ遣ましたるあり。是は汝も消息して召て且那婦人
 角が来り折俱して藏人許赴る人怪むとる候へ。既して那地あり大角
 大角あれ事大駭の成る。又千代九代豊後を使ま欲する事十二分謀る
 てと思ふ必勝の用心精密定脱落る所ゆと稱へる毛野のいふ。豊
 も兼る目今の御意のあら。只愚意の致を所の言を敵の戦艦を焼く。御
 方の洞者。只一隊をえんも。幫助あふ如とる。非如大角が那地を謀る所
 成るとも只其一方のそゆめ。燬を免る敵を候へ。風は那玉をり。這里中も
 起し易り。火樹の敵の後より。必做ま死事なれ心許るは。一旦叛た
 下より。園園の中月を懸る。千代九代を信る時御用不達死候あり。況豫
 知し召る。河鯉の政木大全及石龜次園太卿三等。今這息劇を人信る

汝我這旨を傳へ。術よく隨意相計ひて。昨宵の疲勞もあらん先退りひ
 へと。權且暇を賜ひ。毛野の稍退れ。頃日當城内を賜り。僑居の耳房
 かるる。則信乃道節莊介。小文吾現八を與る。閑室不喚集て。昨宵、大
 と大角を。情地不武藏の柴濱へ遣り。事の顛末又千代九豊俊の事。就て
 毛野が。坐守策あり。と音音曳。單即等。を使ふ。死す。われが先當城へ。召
 まへ。死意味。の悠々。是より。館の仰箇様々々。と言送も。再死生れ。五犬
 士の皆相歡びて。事の便宜を商量。當下道節が。公。大阪。是我黨第一
 番の。知事。裏る。然る。の計較。の。做。一。易。か。死。る。が。却。大角。の。思。ふ。倍。々。
 大師を。よく。説果。し。ける。其。言。と。今。具。不。少。く。蘇。秦。張。儀。を。学。び。て。妙。る。
 定。不。感。心。々々。と。答。れ。の。莊。介。點。頭。々。然。之。那。人。の。詞。寡。か。く。の。へ。必。當。る。こ。の
 了。這。温。順。兒。不。あ。ら。れ。の。敵。地。不。造。り。憶。ぞ。も。馬。脚。を。露。路。を。失。わ。ら。む。并。を。擇。出。

廿。大阪。の。配。り。も。亦。妙。る。哉。と。俱。稱。々。已。され。現。八。も。亦。あ。ら。う。犬。村。の。壁。玉
 返。り。山。貓。を。對。治。し。て。親。の。怨。を。復。去。し。後。の。目。覚。し。拵。を。不。せ。あ。と
 の。く。人。大。々。の。只。文。学。礼。讓。の。人。の。思。も。ヨ。ウ。ら。ん。然。る。を。這。回。の。大。戰。大。殺。義
 兄弟。不。拔。萃。て。必。や。花。や。る。武。勇。の。舉。動。あ。ら。ん。ご。む。と。を。小。文。吾。推。林。林。め
 那。美。の。大師。犬。村。へ。必。成。を。事。を。ら。む。や。其。頭。の。批。評。の。且。閣。て。當。要。を。音
 音。の。媪。を。召。來。を。一。美。不。そ。の。信。乃。の。諾。を。ひ。然。入。開。秘。事。中。
 且。館。の。仰。も。あ。ら。只。消。息。を。亦。傳。る。奴。隸。使。を。め。く。ま。げ。る。所。詮。甲。乙。の。い。ん。よ
 大。田。和。殿。と。咱。等。と。這。御。使。を。奉。り。今。より。瀧。田。赴。々。老。館。の。御。安。否。と
 伺。ひ。な。り。且。那。媪。等。の。秘。策。を。示。し。て。俱。々。明日。夙。か。り。來。て。ん。の。小。文。吾。介
 了。と。答。ふ。毛。野。も。大。の。議。を。好。く。応。々。兩。兄。那。里。へ。お。た。玉。の。事。の。捷。徑。の。上。り。前
 月。水。陸。の。人。馬。調。煉。以。來。久。く。老。館。不。見。參。表。を。な。ら。ぬ。便。是。一。事。兩。用。之。宜。く

計ひぬねとく且勞ひ且急せ道節社介現八も俱ふの議に従ひて大塚大田
 が御用を今より瀧田へ赴くとし而家老東荒川も告んをその美を毛野相
 譚ふ程は信乃小文吾の邊へ身壯衣も伴當を俣して瀧田へ赴けり今程は
 大塚信乃大田小文吾の連り路次をいそぐも程近うね辛くもその日晡
 時の左側は瀧田の城へかゝる其宿所へ立寄りて隨即義実主の隠館へ
 参上りて馳て當番の近習小湊目鱧船員六郎等も就く徳々とすえ上げ
 ら義実主欽びてそ健口をせて對面あり却宜まう前月煉兵の事ありより
 まで久く汝等と見えり亦憶りも是れ軍事起り愈疎闊なるものなり美
 のありては芽生えて少くは這回八州の両管領敵もあせられて數萬の大兵
 水陸より推寄せまると風聲ありその美は曩も安房殿を以て杉倉
 武者助とて告られて其大略と少知り其事愈実なる歟と向き信乃先

答るや豫敵地あり當家の間諜の兵毎々立替り入代り注進漸々其事
 少くも防戦の御準備ありといへ小文吾語を續て敵の大軍遠く自れ推
 寄る事と少くも一條の事極めて実あり紛れあぐもいそぎ渡其館の御雄武
 一戦を遂ぐる數萬の大敵恙なく船と返る稀と慰め直度義実主は
 うちのち含笑と否と勝負人の時運あり前より必と思ひ決むるあり縁
 どの幸やて我子の思ふむ且汝等の羽翼ありて毛野の軍師の任不當り又汝等
 六名所御使して敵を俣とと制度せられといふのあも少くも執り思へ我夙
 家叔と我成の渡りより以来浮世の事か掛念せぬ隱逸者も在るれ修
 折も安然なるものもさる苦もる樂も欲り甘も軍旅の事か耳振立て具はす
 づの思ひども但大江親兵衛が竟ふあの期に遇ざるは遺憾な涯然ども天道の
 盈ると虧く又盈む他は程麻止く還るとも恙るる何れも今ゆる又思ひ益

る。汝等の夜となく日となく軍議の暇あきなきは、恁兩個うち連立て我を訪る故
 の也。と問れて、天士感謝不堪と姑且して信乃が答る。最辱に御懇命臣等が
 かり来けるの然し、るるのふいふに館も毛野も薦めまゐりて、計策の其まふ就て音音
 等御用あり臣等其御使を奉りて、亮折を以て先尊體の御安否を伺ひ、
 る死為御見を願ひまゐり、の義実、王點頭て、開亦要あるるる、不掖留る
 心、似ら、那音音等、媳婦までも、今か、代四郎の信を待た、果敢るる、
 思ふ、何等の所要り知れども、代四郎代り、一役あり、本意、稱人又妙真を
 親兵衛を、くくと日毎待り、是も亦不便、汝等宜く慰め、夕陽へ既、没、
 退り、所要を果、ねと只顧、おそが、立、天士共、侶、ま、左、右、退、
 ち、又小文五が答る、否音音、お、密、議、反て、暮、ま、好、と、時、尚、早、
 い、も、明日、早、天、他、等、を、俱、と、稻、村、へ、参、り、の、其、折、の、辭、ま、り、か、ら、ま、の、を、

い、と、鏡、ま、の、と、請、ふ、と、それ、好、々、と、心、て、猶、も、い、そ、の、あ、信、乃、小、文、五、の、歎、ひ、を、稟、
 ち、躬、退、り、出、る、徑、お、焼、雪、の、宿、所、お、赴、く、程、お、點、燭、時、候、お、り、け、り、信、乃、
 小、文、五、の、伴、の、奴、隸、を、走、ら、せ、て、音、音、お、恁、と、告、一、立、音、音、の、曳、多、單、即、ち、
 歎、ひ、共、侶、お、猛、へ、夕、饌、の、儲、の、る、客、あ、り、と、妙、真、も、早、く、知、り、て、來、り、圍、坐、お、
 入、相、の、鐘、鐃、々、と、响、く、時、候、常、より、早、に、燈、燭、の、花、の、散、ら、ぬ、坐、席、搔、拂、い、ぬ、
 冬、の、日、お、開、く、稀、の、華、臥、坐、の、布、お、あ、り、ま、和、ら、ぬ、老、女、王、人、の、故、ら、お、漏、さ、を、老、
 實、お、偶、々、お、炭、斗、角、火、盤、茶、盆、お、添、一、對、の、茶、碗、お、見、お、錦、の、錦、お、あ、る、巻、
 物、お、堅、煎、餅、を、消、飲、お、執、も、具、ひ、て、待、り、程、お、既、お、り、信、乃、小、文、五、の、來、り、伴、當、お、
 呼、門、お、音、音、の、躬、お、出、迎、へ、先、這、方、へ、と、奥、在、る、儲、の、坐、席、お、請、ま、れ、お、曳、
 單、節、の、火、盤、を、薦、め、茶、を、看、め、云、云、と、他、一、句、我、一、句、迭、の、口、誼、言、訖、れ、妙、
 真、も、音、音、お、就、て、お、の、席、お、連、り、て、信、乃、小、文、五、お、對、面、し、音、音、と、俱、お、あ、り、



信乃小文五口
 夜乃小文五口
 密談も

八天傳九輝卷三十三

あへばよいらう。今番の役も立まらざる時、憾の方方を、両館の憐れむる。是より先、早く照文をも再度の使、京へ遣はし、其歎ひを諄復も感涙果あまらう。信乃、小文吾の慰めて、今も亦老館の御懇命、箇様々々と傳へ示し、却伴當と皆宿所へ遣して、只二天まの儲の夕饌を受るも、其後信乃、小文吾の音、音等三人と妙真を招聚へて告る。今日、我々が、来身へ、但是軍議の密使、毛野が館、小鷹めらう。篁、策あるより、其篁、策の箇様々々、如此々々の一、美々々、千代九圖書助、豊俊が先非と悔て、死刑寛裕の報恩、今番の役も立まらざる。あて、連り、赦免と願ふ事、あて、毛野が計る所、豊俊の詭の計を、仍り、せ、敵小降参、参、請、折、豊俊の使、刀、自、名、遣、さ、る、べ、い。あ、の、美、今、明、日、の、事、あ、ら、む、敵の大軍、推、寄、さ、る、一、兩、日、以、前、を、好、と、ま、ら、れ、も、刀、自、名、豊、俊、と、面、善、ら、む、那、地、到、り、不、使、さ、る、べ、い。明、日、堀、内、貞、約、許、遣、し、て、豊、俊、小、對、面、さ、る、と、あ、ら、館、の

御内意、かくの如し、但、一、兩、個、の、幼、息、と、推、し、め、た、時、宜、ら、ね、ば、妙、真、大、母、関、と、權、且、膝、下、小、類、ひ、ひ、ひ、あ、の、美、の、別、談、を、折、り、あ、ら、在、せ、言、省、れ、て、宜、し、と、小、文、吾、是、を、説、示、せ、信、乃、の、語、を、續、け、足、ら、ず、を、補、ふ、密、談、蕭、々、と、け、れ、音、音、奥、の、早、即、ち、の、額、を、哀、れ、果、て、且、然、と、大、く、頭、と、拾、び、憶、ぶ、吻、と、息、つ、は、く、二、天、士、小、向、ひ、共、侶、小、答、る、も、數、る、身、の、過、分、に、兩、館、の、御、洪、恩、代、四、郎、の、御、奴、奴、等、も、御、杖、持、の、下、置、せ、を、仰、せ、れ、甄、形、の、照、る、日、小、存、り、な、ら、ん、其、御、衷心、の、か、ひ、も、る、ほ、る、折、ら、う、代、四、郎、の、信、も、る、か、り、も、事、を、孰、の、日、あ、る、命、を、捨、て、御、恩、小、答、ら、る、や、と、思、へ、心、焦、燥、ら、し、小、慨、し、かり、小、幸、あり、て、淡、死、婦、女、子、と、大、事、の、御、用、小、答、ら、る、一、期、の、執、び、の、上、や、れ、る、危、な、一、尺、八、寸、乳、を、離、れ、て、獨、遊、を、ま、た、れ、朝、夕、と、も、日、易、かり、小、憚、り、さ、ら、妙、真、姨、御、宜、く、憑、き、ま、る、と、云、口、誼、存、死、媳、婦、岳、母、答、雄、雄、あ、く、勇、を、信、乃、小、文、吾、の、歎、び、感、して、猶、云、云、と、談、する、妙、真、の、心、も、せ、く、淚、此、つ、

夫のこがれに 信乃小文吾ふうち向ひて怨むる中 喃犬田王犬塚主言憚りまけられぬ非如等の
 御内意まれ思ひ汲と死御計に犬阪主も恨くは代四郎更の富山以来親兵
 衛不就してて兩館の御恩と稟され我孫とてよめあねど親兵衛は取早の御身
 達先もて兩館の見参の初も尚總角多年歳を優て素藤と征伐不正
 あり二度の大功あり其後又路遥る京師へ使と奉りて目今家小在るも敵
 へ間者不遣まて然る大事の密使不婦女子で宜くはむ憚りながら奴家をこも
 犬阪王の薦め稟して用以さるる異日親兵衛がかりても面伏する一役へ侍れ
 船の上の技も船長の母にけ奴家小の刀自達かいつく及ぶ死肉身るる依介
 せう往る日敵地の光景と注進不参りとも今番の御用不達ぬる奴家軍軍安困と
 宿所不在りて人の穉児を衛して早暮されんや依介も員も事半七下る情をいふ
 せと恨切るる氣と胸の憶ごとと泣けぬ驚れ信乃小文吾噫聲耳高くと推

鎮め。信乃が先諭を中 姨御の怨言定み以り理のるぬあねども大阪が薦め稟
 せ。這老弱三個の婦人を敵地へ間者不遣まて亦是以ありてをか弁と甚麼とと
 るる音立見の媼の器械會と男子不勝る本事あり。あはれの上も荒茅山と犬田
 づれらも目撃。あはれ漫不勝ゆりて答るぬあはれ又曳も單節兩嬭婦の年尚少くて
 も咄ぢも目撃。あはれ漫不勝ゆりて答るぬあはれ又曳も單節兩嬭婦の年尚少くて
 且顔色醜くは蓋敵の士卒たる者誰の色と好むを然豊俊が敵降参は密使
 と伴りて這色どりて事と謀ら敵の士卒疑る相教ひて信容れぬの事を犬阪が
 思ふも。胡意れ身を用ひさるる意味と悟る恨まわすと解け小文吾も亦
 らる。畢竟止るも館の御為を思ひまらぬ私の一義をも役不足をいふ事
 らる。枉々意見不従ひぬと諭其音音曳も單節も共侶不慰めて盡誠の言の葉不
 かる涙の露の玉稜の除れても輾がた妙真才小目を拭いて余等も我身の不肖を恨
 より外はほねも親兵衛が人先たる功と思ひ召れる切てその人数加る敵所へ

ねとある。御説を穿る。今ある。息絶て身の死。死ね開て後。後守人親兵衛が面伏
 るを思ふ。花の昔の老樹の悲。町人の後家町人の母より。身の大刀抜く。樹を知
 る。わが忠信の時役。生甲斐も。既覚期を究め。恥と知る者
 ぞと。後守親兵衛。然る。身と起して。外面投て。小文吾慌て
 被居。理を辨へ。有敷。老女。今。短慮。似け。吐る。窘れ。信乃。殆困
 お果て。妙真。寛解。姨。然。思ひ。俱。稲村。又。大阪。商
 量。御身の。隨意。做。も。わえ。必。性。起。の。喃。大。姨。の。心。一。筋。も。忠。信
 節。義。の。故。理。と。和。殿。の。主。張。甚。麼。と。向。小。文。吾。然。い。と。終
 中。の。果。も。わ。俱。稲。村。お。然。然。雪。の。穉。子。を。半。何。せ。い。と。い。う。ち。夢
 音。音。と。曳。多。單。節。も。俱。飲。び。て。我。們。之。人。御。用。立。て。も。姨。の。憾。を。迷。れ。快。く
 ぞ。ゆ。え。ん。そ。又。本。意。あ。る。ん。ガ。二。尺。八。寸。留。守。者。の。炊。妻。任。用。せ。る。左。も。右

も。あ。り。却。あ。り。非。如。泣。く。も。暮。不。も。飢。死。る。幸。を。と。憐。れ。信。乃。頭。を。掉。く。
 否。と。母。大。母。さ。宿。所。在。を。穉。子。を。留。守。置。人。怪。む。信。乃。兩。個。の。穉
 子。も。親。達。俱。て。稲。村。へ。送。那。里。造。と。穉。あ。え。と。一。議。を。果。音。音
 曳。多。單。節。が。飲。ひ。之。歎。を。轉。し。ち。笑。れ。妙。真。の。貌。を。改。め。信。乃。小。文
 五。尺。謝。し。て。思。ひ。多。く。刀。給。們。の。心。詞。を。盡。さ。す。小。夜。の。深。る。も。知。り。只
 一。筋。身。老。女。の。思。病。を。人。を。恨。身。を。托。他。の。讓。ら。し。思。ひ。忠。義。の。誠。心。を
 信。乃。猜。し。樹。と。相。計。ひ。好。意。を。面。と。起。せ。飲。ひ。奴。家。の。腹。立。詞。の。功。を
 信。乃。目。か。つ。束。と。の。本。意。と。稱。入。信。乃。知。り。腹。立。詞。の。功。を
 信。乃。痛。く。思。れ。許。し。と。ち。勸。解。れ。信。乃。笑。り。點。頭。を。妙。真。も。同。前
 勸。解。ら。中。を。え。却。咱。の。犬。田。と。俱。明。日。早。天。小。稲。村。か。り。參。見。姨。の。妙。真。の
 母。子。五。名。と。各。轎。子。を。駕。り。背。より。續。け。稲。村。へ。請。來。又。轎。子。を。用。外。親。を。數

所以ぞ。その我の伴當を分りて兩三名残し置くべし。他們を俱してはたぬ。
 といふ小文吾も俱ふ。脚小の出る年少はゆる老さる。身粧の時の移る者。縮
 村の程近き。日景短は時候なれ。今宵も準備をいそめ。と期を推其。妙真音
 音曳の單節等も皆共侶の心と多。又茶を煮てを薦めけ。その中力二尺八を
 暮るると。躰を臥房入り。早く熟睡をさる。この這客あるを知らざりけり。既而て
 信乃小文五日。妙真音音曳の辭し別れて。頃日姑直疎る。當城の宿所から來て
 共侶の夜の明を留守を謀僕われ。皆飲ひて。仕けり。憊而次の日。信乃小文
 五日の早天。縮村へ赴く程。妙真及音曳の單節の力二尺八を推して。那伴當の
 央ふる。四箇の轎子から駕り。俱に縮村へはたけり。抑這一對四個の義姑節婦
 が。情地の軍役不用に。後の話説甚麼を。開け下回の解分ると。聽ねが。

南總里見八犬傳卷之三十三終

